

第5章 總括

本書で報告した伝法古墳群（中原第3～6号墳）の調査成果、とくに中原第4号墳の考察を通じて、古墳時代後期後半（6世紀後葉）の東駿河における中小首長層の特質を明らかにした。埋葬施設の特徴、副葬品、執り行われた儀礼、さらに古墳築造の背景とその後の地域史の展開など、明らかとなった内容は多岐にわたるが、さいごにこれらを要約し、総括としたい。

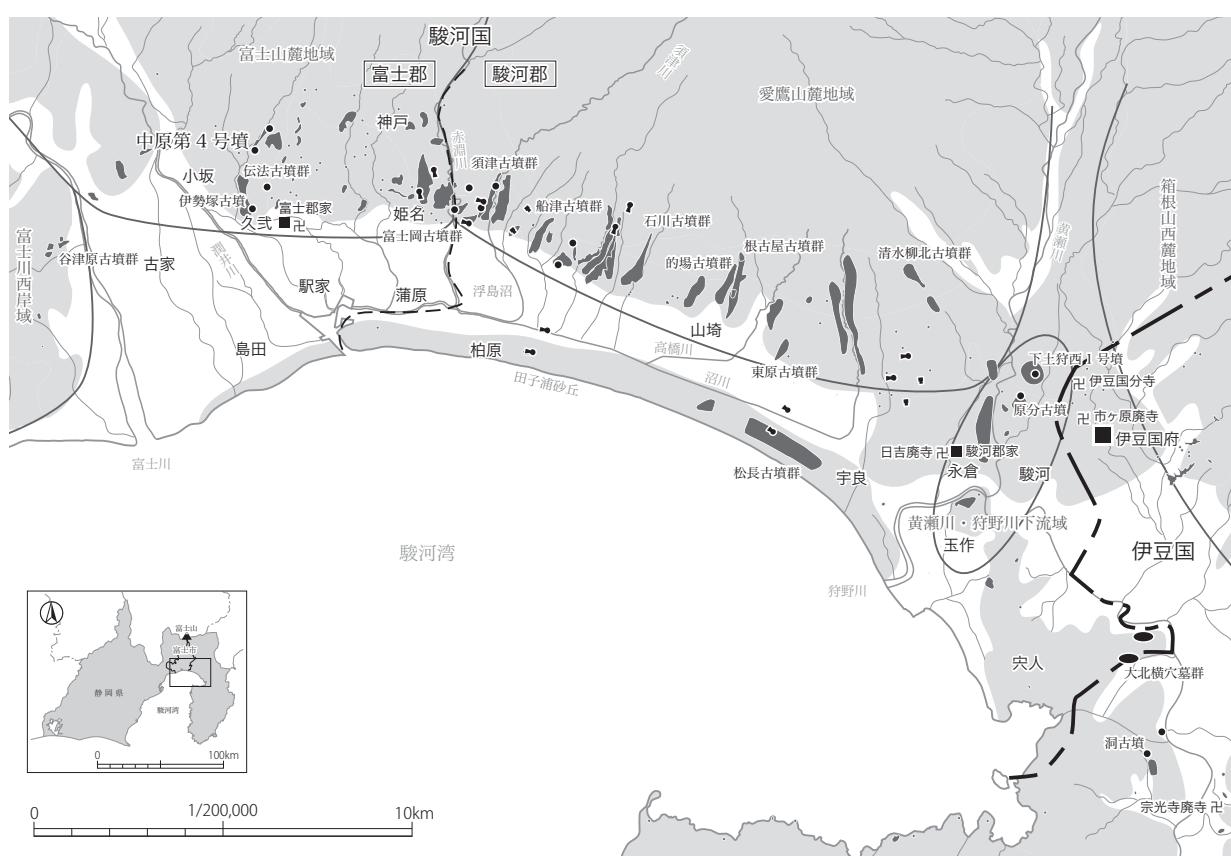
古墳の立地 中原第3～6号墳を含む伝法古墳群は静岡県富士市伝法の富士山南麓の緩斜地に立地する。中原第4号墳は駿河湾に注ぐ潤井川に合流する伝法沢の東側の標高73m付近に占地しており、駿河・甲斐を結ぶ交通の要衝に倭王権による東国経営の前線としての機能を持って築かれた可能性が高い（本書第4章第2節、藤村論考）。

また、6世紀の宣化・欽明天皇以降に交通の重要なルートでもあるこの地に屯倉が設置されていたとすれば、潤井川流域の沢東A遺跡や中杼・中ノ坪遺跡がその候補としてあげられる（本書第4章第1節、佐藤論考）。

伝法古墳群が展開した地域は、後の令制下における駿河国富士郡の範囲に該当する『静岡県史』によると富士郡家を中心に西側に久式郷、東側に姫名郷、南側に駿家郷が想定される。

東駿河における古墳の様相差は、富士山麓地域にあたる伝法古墳群、比奈古墳群と、愛鷹山麓地域にあたる須津古墳群、中里古墳群、船津古墳群、石川古墳群、的場古墳群、根古屋古墳群に区分することができ、それぞれがのちの駿河国富士郡、駿河国駿河郡の区部に属する。

さらに伝法古墳群が築かれた範囲には、令制下において富士郡家が形成された。その中枢施設は伊勢塚古墳の隣接地に配置されている。これは、駿河湾から直接海路でたどり着くことができることに加え、陸路でも東海道が通ることや甲斐への分岐点であることなど交通の要衝であることに起因する。富士郡家形成の下地は、集落や古墳群の展開にみるよう古墳時代中期後半以降に活発化する地域開発にあったと評価することができよう。



第 228 図 東駿河における古墳の様相と古代郷里

古墳の規模と構造 中原第3号墳は、東西で10.76m、南北10.67m（周溝を含む。以下、同様）、石室全長4.57mを測る横穴式石室墳（円墳）である。

中原第4号墳は、東西14.47m、南北13.77m、石室全長5.52mを測る横穴式石室墳（円墳）である。中原第5・6号墳を含め、いずれの石室も無袖で東駿河に多く認められる框石を用いた段構造を有する。中原第4号墳は富士山南麓における最初期の横穴式石室と評価でき、新たな埋葬形態導入のきっかけを作ったと評価できる。

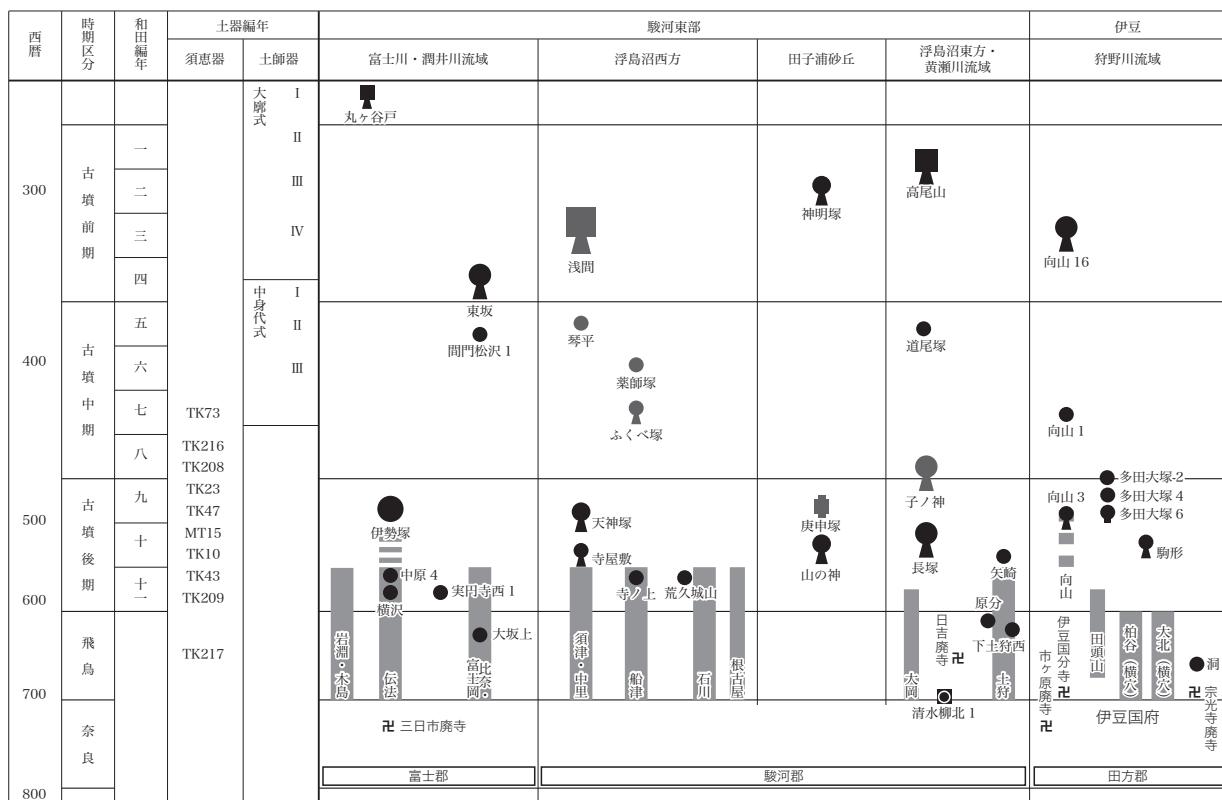
副葬品の特徴 中原第4号墳は未盗掘と考えられる横穴式石室墳で、最低3回の埋葬が認められる。副葬品の多くは初葬に伴うと考えられるものが多い。

副葬品には玉類、刀剣類、鉄鏃、砥石、鍬鋤先、斧、鉈、鑿、鉄鉗、鐫子、針、轡、鎧吊金具、須恵器、土師器などがある。鉄鏃は尖根、平根を合わせると最低でも131本が出土しており、駿河・伊豆では、1基あたりの最多出土量である。さらに中原第4号墳を特徴づけるのが10種類38点以上を数える生産用具である。特に東海地方で唯一出土した鉄鉗やこれらの豊富な生産用具からは中原第4号墳の被葬者の出自や職掌、当時の地域様相を読み取ることができる。

古墳の築造時期 中原第4号墳では埋葬状況や副葬品の時期から3回の埋葬があったと想定している（本書第4章第3節、田村論考）。初葬に伴うと考えられる銀象嵌大刀や轡、須恵器などは須恵器編年におけるTK43型式期に併行し、古墳様式編年では和田編年（和田1987）における十一期、集成編年（広瀬1991）における10期に相当する。暦年代では、およそ6世紀後葉に相当させることができる。

中原4号墳の被葬者像 副葬品として注目されるのが前述のとおり、豊富な生産用具である。そこからは広く農耕、織物など手工業生産に関わる被葬者の職掌が想定される。ほかにも鉄鉗の存在は鉄器の生産や加工に従事する技術者集団との密接な関係が想定され（本書第4章第8節、鈴木論考）、また、複数の生産地の須恵器が混在している様相からは、須恵器の生産流通へ強い関与を行う姿も想定される。（本書第4章第9節、和田論考）。

加えて、東駿河・伊豆における鉄鏃の最多副葬であることは、被葬者が武人的側面を強く有していたことに加えて、やはり鉄器の生産・流通に直接的に関与する立場であったことを改めて指摘することができる（本書第4章第7節、菊池論考）。



● 編年根拠が乏しい古墳

第229図 東駿河・伊豆における古墳の変遷

渡来系の埋葬施設である堅穴式横口式石室や中原第4号墳と同じ段構造を有する無袖石室が卓越する北部九州や愛媛県域（今治・松山地域）、奈良県域（葛城地域）においても生産用具が豊富に副葬されるなどの共通点もある（本書第4章第8節、鈴木論考）。玉類の分析からも西日本地域との共通性がみられる（本書第4章第5節、戸根論考）。さらに轡のみの複数埋納からは馬匹生産、乗馬技術に関連する被葬者も想定され、兵庫鎖立聞素環円環轡の分布が多く見られる点も愛媛県域と共通する（本書第4章第6節、大谷論考）。

ほぼ同時期の駿河における最高位の古墳としては静岡市賤機山古墳があり、その格差は明確である。賤機山古墳の馬具は金銅装であったことに対して中原第4号墳の馬具は鉄製のものに限られる。刀剣類も金銅装のものではなく、銀象嵌装もしくは鉄製であることなど階層差が明確にうかがえる。こうした地域内における序列が形成される背景には倭王権の統制力が働いていたことは想像に難くない。

以上をまとめると、中原第4号墳の副葬品は最高位の首長のものとは言えないものの、倭王権との結びつきを背景に、鉄器の生産や馬匹生産、食料生産など産業全体に関わるものであることが分かる。横穴式石室や生産用具からは西日本地域の渡来系集団との関係もうかがえる。

中原第4号墳の被葬者には、この地域で新たに配置された技術者集団の統括者としての性格をもちながら、主要な交通網を管理することでその流通体制の維持をも担当し、王権に奉仕した人物を想定しうる。

参考文献』

- 大谷 宏治 2010a 「副葬品からみた無袖石室の位相—東海～関東を中心にして」 土生田 純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣
- 大谷 宏治 2010b 「古墳時代後期～終末期の古墳について」 大谷 編『富士山・愛鷹山麓の古墳群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第231集（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 鈴木 一有 2003 「東海東部の横穴式石室にみる地域圈の形成」『静岡県の横穴式石室』静岡県考古学会
- 鈴木 一有 2010 「駿河東部における無袖石室の史的意義」 土生田 純之編『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣
- 鈴木 一有 2013 「7世紀における地域拠点の形成過程—東海地方を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』（新しい古代国家像のための基礎的研究）第179集
- 土生田 純之編 2010 『東日本の無袖横穴式石室』雄山閣
- 広瀬 和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版
- 藤村 翔 2014 『富士山の下に灰を雨らす—富士の噴火と古墳時代後期の幕開けー』富士市立博物館第53回企画展
- 山中 敏史 1994 「古代郷里比定地一覧」『静岡県史 通史編I 原始・古代』
- 吉村 武彦編 2005 『古代史の基礎知識』角川選書
- 和田 晴吾 1987 「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34卷第2号